



2019 年 (令和元年)

11月号 (No. 894)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

第60回、節目の木暮祭を開催 木暮理太郎の足跡や功績を振り返る

10月20日、金峰山麓の金山平で第60回となる木暮祭が開催された。本会第3代会長で、奥秩父の開拓者として知られる木暮理太郎を顕彰する碑前祭である。木暮の足跡は関東周辺の山々や北アルプスを中心に各地に及び、それらに関する多くの著作もある。節目の年に当たって、改めてその足跡や功績を振り返ってみたい。

山梨支部 矢崎茂男

令和元年度の木暮祭

木暮祭は、日本山岳会第3代会長で、奥秩父の開拓者である木暮理太郎を顕彰する碑前祭である。毎年10月第3日曜日に、木暮^{かや}理^{だう}太郎^{らう}が建つ山梨県北杜市須玉町の金山^{かなやま}平^{ひら}で開催されている。昭和35(1960)年に始まったこの木暮祭は、今回が第60回。還暦を迎えたことになる。大変息の長い行事に

なった。

木暮のレリーフは、昭和26(1951)年5月6日に、金山平北の山腹にあった露岩にはめ込まれた。これが最初の木暮碑である。昭和34年、山梨県を席卷した台風によって岩が倒壊しそうになったため、翌年、下方の平坦部に石碑を設置してレリーフを移した。現在の本暮碑がこれである。この年の10月

目次

第60回、節目の木暮祭を開催	1
木暮理太郎の足跡や功績を振り返る	1
秋田支部設立60周年記念祝賀会を開催	4
第35回東北・北海道地区集会を宮城蔵王で開催	5
第10回森づくり連絡協議会を猿投山で開催	6
追悼 村井先輩を偲んで	7
さんけん通信 番外編	8
東西南北	12
活動報告	14
図書委員会／山行委員会／麗山会	
支部だより 東九州支部	16
新入会員	16
図書紹介	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時



本部ルームに掛かる木暮の肖像写真

8日、新しい碑の前で第1回の本暮祭が開催された。この本暮祭とは別に、木暮の十三回忌に当たる昭和31年に、関係者によって碑前祭として5月に継承されてきたが、平成14(2002)年の第40回をもって終了し、秋の木暮祭に統合された。

祭の前日(10月19日)に、みずがき山リーゼンヒュッテで交流会。山梨支部会員が「奥秩父の先駆者・

木暮理太郎と金山を囲む山々」と題するミニ講演を行ない、木暮の生地・群馬県太田市の「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」事務局長が、会の活動の様子を報告した。懇親会では、県内外からの参加者が、木暮祭の歴史や木暮理太郎の足跡などを語り合いながら、和やかなひとときを過ごした。

翌20日は、前日の雨が上がり爽やかな秋晴れとなった。金山の南に立つ向山(五里山)に記念登山。20名が参加し、秋の奥秩父西端の風致を味わった。

木暮祭は午後2時から開催された。木暮碑委員会を構成する3団体(増富ラジウム峡観光協会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部)の代表が挨拶。木暮碑に献酒・献花したのち、金峰山を見上げる碑



今年の木暮祭で碑前に献花・献酒をする

を囲んで記念撮影を行ない祭は終了した。この後、増富ラジウム峽観光協会による恒例の「ほうとうを楽しむ会」が開かれた。秋晴れの金山平で甲州名物のほうとうに舌鼓を打ちつつ、木暮祭がこれからも長く歴史を重ねていくために、木暮理太郎の功績と祭の意義を正しく伝えていくことの重要性を確かめ合った。

木暮の足跡と奥秩父への憧憬

奥秩父は今年6月、「甲武信ユネスコエコパーク」として登録され、その山岳美・渓谷美・生物の多様性などが世界に認められたが、木暮理太郎はこの礎を築いた点で

も、再評価されるべきである。以下に木暮の略歴や業績の重点について触れたい。

木暮は明治6(1873)年、群馬県新田郡強戸村(現・太田市)に生まれた。11歳のとき、富士講に参加して富士山に登山。明治26(1893)年、第二高等学校(現・東北大学)に入学し、このころから盛んに山に登るようになる。この年、妙義山・浅間山・蓼科山・木曾御嶽山に登山。29年には針ノ木峠・立山・乗鞍岳、木曾御嶽山・木曾駒ヶ岳・甲斐駒ヶ岳・金峰山・十文字峠・武甲山に連続登山している。32年に東京帝国大学入学。3年後に田部重治を知り、以後、ともに奥秩父を中心とする山行を重ねることになる。

大正2(1913)年に日本山岳会に入会。同4年から3年続けて笛吹川東沢を遡行し、田部とともにその渓谷美を世に紹介した。昭和10(1935)年には、日本山岳会第3代会長に就任。昭和13年、名著『山の憶ひ出』上巻を、翌年下巻を出版し、昭和19(1944)年5月7日、71歳の生涯を閉じた。

木暮は北アルプスの核心部の探検的登山なども行なっているが、

木暮が足繁く通い、『山岳』などに紀行・随筆を寄せてその魅力を発信し続けたのは奥秩父だった。彼は初めこの山域を「秩父の奥山」と記したが、ここから「奥秩父」の新称が生まれ定着していく。この奥秩父への特別な愛着について、木暮は次のように語っている。

「東上州から見た冬の秩父連山は、ただに色彩がうるわしい許りでなく、自分には更に懐しい思い出の湧く山である。或年の冬であった。日は御荷鉾山の後に落ちて、其あたりの天は黄金色に輝き、夫より地平線に沿うて東するに連れ、樺色・桃色・草色と色美しく風ぎ渡った夕暮の空に、紫と紺とを濁らぬ程に混ぜて、幾度か塗り上げたような深い色の秩父連山が、劃然と画き出されたのをふと心付いて眺めた時には、未だ十一、二の少年であつた自分も、紙鳶の糸を巻くことさえ忘れて、磁石に吸わるる鉄のよう

にひたと眼を引き付けられて仕舞った。」(「秩父の奥山」)

憬となつて、彼の内面に生き続けたのであろう。

金峰山への想い

奥秩父の中でも、とりわけ木暮が心酔したのが金峰山だった。

「金峰山は実に立派な山だ。独り秩父山脈中に嶄然頭角を抜いて居る許りでなく、日本本の山の中でも第二流を下る山では無い。世に男の中の男を称えて裸百貫という諺があるが、金峰山も何処へ放り出しても百貫の貫禄を具えた山の中の山である」(「秩父の奥山」)

深田久彌が『日本百名山』で引用している一節である。金峰山は、標高では北奥千丈岳に首位の座を譲っているが、秀逸な山容や歴史の古さの点で、奥秩父の盟主の地位は譲りようがない。『甲斐国志』は金峰山を、「州の北鎮」として第一番に取り上げ詳述している。奥秩父にとどまらず、ほかの山域の名山と比較しても第一流の山なのである。

木暮と金峰山との出会いは、少年時代に遡る。

「秩父山塊の金峰山は、私の



昭和36(1961)年の木暮碑 撮影=横山厚夫会員

古い山旅の臆げな記憶の中では、比較的是つきりしている方である。此山の名を知ったのは小学校の何級であったか忘れたが、何でも暗射地図で甲州の北境に栗の毬殻に似た大きな山の符号があった、それが金峰山だと教えられたのが最初である」(「金峰山」)

初めての登頂は明治29(1896)年8月21日のことである(異説あり)。この山頂で、木暮は極めて重要な体験をした。

「はじめて金峰山の頂上に立った私は、抑えがたい衝動から、いきなり五丈石に攀じ登って、誇らかに昂ぶる心を満足させたのであった。そして岩から下りると、小さい灌木の青い茵にふつくりと身を埋めて、ごろりと寝ころんだまま長い間空を見詰めていた。其時私はふと今まで気が付かなかった不思議な問題にぶつかったのである。立山の絶頂では、室堂をすぐ脚の下に眺めながら、なぜあのように淋しい頼りない思いに堪えかねてあわただしくかけ下りたのか。乗鞍岳の絶頂では、一夜を立ち明しているながら、朝になつてなぜ物に怯えたようにして、一步は一步と人里に近づくのを楽しんだのか。木曾の御嶽でも駒ヶ岳でも、絶えずささやかな、それでいて直ぐ心の平衡の破れるような、不安に襲われていたことを覚えていて。それであるのに金峰山の頂上では、岩に登ったり草に寝ころんだりして、ゆつたりとした気持で、ぼんやり空を眺めている自分を見

出したのである。これは又何たる相違であろう。斯くて始めて私は山の威圧というものをしみじみと感得した。山が大きければ大きい程威圧も強いのであろう。そして金峰山こそはその当時の私にとつて最もふさわしい山であつたに違ひなかつた。山を味わうことを教えて呉れた山、懐かしい金峰山、これが秩父の山から最初に受けた私の忘れ難い印象である」(「秩父のおもいで」)

「山を味わうこと」の喜びは、その後の木暮の登山態度を決定するものになり、のちに盟友となる田部重治との奥秩父における跋涉は、この態度に貫かれていた。『山岳』の編集で発掘した若い書き手に、大島亮吉や高畑棟材などをはじめ、いわゆる「静観派」の岳人が多かったのも、このことに由来するのだろう。

田部祭・深田祭とともに

平成30(2018)年7月21日、笛吹川上流の西沢・東沢合流点近くに建つ田部重治文学碑の前で、第1回田部祭が開催された。田部

は、木暮とともに奥秩父を隈無く歩き、美文をもつてこの山城の魅力を発信した。田部が書いた第1回東沢廻行の紀行「笛吹川を溯る」は、戦後、新制高校の国語教科書にも掲載された逸文で、この文章に誘われて東沢を訪れた人は少なくなかっただろう。

文学碑は30年ほど前に建てられたが、長い間放置されてきた。ようやくこの地で、登山史に刻まれた田部の足跡が顕彰されることになったのは、実に喜ばしいことである。

ふたりの事績が、毎年、奥秩父の西と東で語り継がれることによつて、「甲武信ユネスコエコパーク」を巡る活動にも様々な方向性が生まれてくるのではないだろうか。さらに言えば、奥秩父南西端の茅ヶ岳山麓に建つ深田久彌記念碑の前で行なわれている深田祭との連携を模索することも、新しい価値を生み出す可能性がある。

奥秩父には、日本山岳会および日本の登山界を支えた3人の傑人の魂が眠っている。このことを改めて思い起こした60回目の木暮祭だった。

REPORT

秋田支部設立60周年記念祝賀会を開催

秋田支部 鎌田倫夫

昭和34(1959)年6月28日に、秋田魁新報社講堂において、全国15番目の支部として誕生した秋田支部は、令和元年、設立60周年を迎えた。

記念祝賀会は、10月19日(土)、乳頭温泉郷・鶴の湯温泉別館「山の宿」で開催された。古野淳・本会会長はじめ、東北各支部と静岡支部から27名、秋田支部も27名の計54名が参加し、午後2時に開会した。はじめに、鈴木裕子・秋田支部長が設立60周年を迎えるに当たり



設立当時のことを話した長岩嘉悦会員(設立会員)

歴代の支部長への感謝を述べた後、記念事業として、前年度から秋田県内の山に登る「60座ラリー」をはじめ、6月には「おらほの山」である「太平山集中登山」を行ない、山頂で本会山行委員会の方々と交流をしたこと、40周年に記念事業として日本一低い「明田富士山」に植樹した桜の標柱を建て替えたとの報告があった。そして、山を楽しみ、身の丈に合った支部運営を行ない、70周年を目指してまいります、との挨拶があった。続いて物故会員へ黙祷が捧げられた。

設立会員を代表して支部名誉顧問である長岩嘉悦・永年会員は、挨拶の中で支部設立の経緯として、第16回秋田国体開催に伴って設立された、などと話された。

古野淳会長からはお祝いの言葉をいただき、日本山岳会の現状と新しい時代に向かって示された「4つの柱」―遭難防止、山岳文化、支部活動、自然保護について話された。地元仙北市の倉橋典夫副市長からは支部設立60周年へのお祝

いと、遠路からの参加者へ歓迎の言葉を述べられた。また、秋田支部と親しく交流のある韓国山岳会旧元老会や慶南支部、中華民国山岳協会などからの祝詞も披露された。

続いて佐々木民秀・永年会員から、日本山岳会初の地方集会となった第1回東北地区集会是昭和57(1982)年に、この鶴の湯温泉に宿泊し、交流山行は秋田駒ヶ岳であったことなどを含め、支部の歴史が語られた。本祝賀会は60周年を迎えた秋田支部設立の経緯を振り返る良い機会であったと思う。

講演は「山岳信仰と温泉」と題して、講師は鶴の湯温泉代表取締役会長である佐藤和志・副支部長。鶴の湯温泉に関わる神社のご神体のことや、温泉を経営することになった経緯、県道から鶴の湯温泉までの道は、中古のブルドーザーを購入して自分で切り開いたことなど、ユーモアを交えながらのお話であった。

懇親会は鶴の湯温泉本館大広間にて今野昌雄顧問の挨拶で始まり、続いて東北各支部を代表して佐藤一夫・福島支部長から祝辞をいただき、本年、永年会員に推挙され



草紅葉が広がる大白森山頂部でみちのくの秋を満喫

た奥村清明会員のご発声で始まった。鶴の湯温泉の美味しい料理が会を盛り上げて、遠来の皆さんに秋田のお酒を楽しんでいただいた。翌日の交流山行は、十和田八幡平国立公園に位置し、鶴の湯温泉から往復となる小白森山(1144m)・大白森(1215.5m)に登った。好天に恵まれ、山頂からは八幡平・岩手山・乳頭山・少し雲に隠れている秋田駒ヶ岳などの眺望が得られ、山頂一帯の広大な高層湿原の草紅葉を楽しんでいた。

(秋田支部事務局長)

REPORT

第35回東北・北海道地区集会を宮城蔵王で開催

宮城支部長 富塚和衛

宮城支部主催で東北・北海道地区集会が令和元年10月5日、6日に、蔵王町遠刈田温泉で開催されました。地区集会にはメンバーである東北・北海道各支部に加えて東京多摩支部、千葉支部、遠くは岐阜支部から総勢約70名の参加をいただきました。

東北・北海道地区集会は、今年度の開催が全国支部懇談会と同様に第35回になりますが、記念すべき第1回は昭和57(1982)年に秋田支部の主催で開催されています。ちなみに、交流山行は秋田駒ヶ岳でした。以来、東日本大震災のため中止した年などもありましたが、35回という歴史を重ね、北海道・東北地方にお住まいの日本山岳会会員の交流・親交の重要な場となってきました。

開催に当たっては、まず開催場所を、過去3回秋田支部・岩手支部・山形支部)の地区集会の実施内容などを参考にさせていただき、「地元」に伝わる山に関わる生活・文化」をコンセプトに蔵王とさせ

ていただきました。

さらに、今回の地区集会開催に当たりご後援もいただいた地元有志(遠刈田温泉)が結成した「蔵王古道の会(遠藤裕一会長)」が、江戸時代の古道を切り開き、町おこしの一環として「蔵王古道の御山詣り」のイベントを毎年実施していることも理由の一つです。また、開催の諸準備のために支部内に「東北・北海道地区集会特別委員会」を立ち上げ、通算7回の打合せ会を開催し、東北・北海道地区の会員らの皆様をお迎えする準備をしました。

ACTIVE RESORT

SMIYAGI ZAOホテルを会場に、1日目(10月5日)は、午後から受付後の支部長会議に続き、記念講演会を実施しました。講演は「蔵王の信仰と歴史と蔵王古道」と題し、蔵王町教育委員会生涯学習課課長補佐兼社会教育主事の佐藤洋一氏にお願いしました。講演内容は、「蔵王山」以前、修験道の流入(蔵王山の誕生)、修験勢力の

移り変わり、「蔵王の御山詣り」ルートと参詣登山等」についてのお話でした。翌日行なわれる蔵王古道交流登山の予備知識としても大変に有意義な講演ではなかったかと思います。

夕刻からは懇親会を開催、来賓として出席いただいた地元蔵王町長の村上英人氏からご祝辞をいただき、酒宴が始まりました。宴席では各支部から「地元ソング」が披露され、中にはハーモニカ伴奏付きの支部もあり、交流・親交の宴は大いに盛り上がりました。

2日目(10月6日)の交流山行は、東北地方を代表する名山、蔵王山で行なわれました。前日の講演会でもお話があったように、この山は古来より修験者の山として崇められてきた山でもあり、紅葉が誘う古の道をたどりました。

交流山行参加者はAコース(大鳥居から刈田岳山頂・約7時間)とBコース(澄川から刈田岳山頂・約4時間)に分かれ、「蔵王古道の会」の会員に先達を務めていただき、道すがら石碑・石像などにまつわる説明を聞きつつ古の道に踏み進んでもらいました。朝方はしよぼ降る雨に心を折られましたが、

時間がたつにつれ天候も回復し、多くの参加者には刈田岳山頂を踏んでいただき、また、指呼の間に見える蔵王のシンボル「お釜」の絶景をも堪能していただけたのではないかと思います。

ホテル前での解散式では、「楽しい、心に残る古道歩きだった」とのお声もいただき、無事に第35回東北・北海道地区集会は予定どおりを終了、来年度の主催支部である青森支部にバトンタッチすることができました。これも一重に東北・北海道の各支部長はじめ参加者の皆様のお力添えがあったからこそと、改めてお礼を申し上げます。



交流登山で大黒天から刈田岳山頂に向かう参加者たち

REPORT

第10回森づくり連絡協議会を猿投山で開催

高尾の森づくりの会代表 吉川正幸

猿投山(629m)の稜線に、桜木を見るために登った。猿投の森づくりの会代表の和田豊司さんが、「第一の吉野山」にしたいと推していた山桜である。

それは、今まで私が見たこともない直径1m近い大木で、桜としては古木であるのにもかかわらず、木肌は明るく綺麗であった。それが広葉樹の尾根の上に何本もある。100年前にはハゲ山であった猿投山で立派に成長した桜は、春にはよみがえった新緑と競うように、さぞかし見事な花を咲かせることであろう。

*

2019年10月5日、6日に、日本山岳会の中で森づくりを行なっている支部の有志や自然保護委員会の委員が集まり、愛知県瀬戸市で第10回森づくり連絡協議会が開催された。古野会長、高橋東海支部長も参加され、5支部から34名が集まった。第9回も2015年に同じ場所で開催されたが、今回も東海支部と猿投の森づくりの会

が世話役となつて、全国から関係者を招いた。会議と宿泊の場所は、東京大学・生態水文学研究所を提供していただいた。

会議冒頭の生態水文学研究所長補佐の田中延亮氏による基調講演「尾張東部丘陵の森と水の100年の変遷」の中で、研究所の成り立ちについて興味深い話を伺うことができた。

瀬戸市の陶器作りの燃料として猿投山を含む尾張東部丘陵の山は、明治中期には、見渡す限りのハゲ山となり、保水力を失った山からの土石は、水害を起こすまでになっていた。こんな惨状を見て1905(明治38)年に愛知県知事が山林の再生を依頼したのが東京帝国大学だったという。以来、山中に植栽のための土留を築き、小規模な砂防ダムを多数造り、植樹を行なってきた。1922(大正11)年に現在の研究所の前身である施設ができてからは、山からの流水量と土砂の流量の観測が続けているという。緑の山が災害を防ぐとい

う100年間の実績の図表を見せてもらい、改めて森を守る意味を再認識させられた。

10月5日は基調講演の後、高尾の森づくりの会の山崎勇さんによる、北高尾の山に設置した観察カメラに映った動物たちの画像映写と解説があり、東海支部自然保護委員長の前藤恵美子さんからは、東京大学赤津研究林と猿投の森の活動についての講演が行なわれた。その後、各支部の森づくりについての報告があった。夜の食事会・懇親会は、和気あいあいとした雰囲気の中で行なわれ、各支部の情報交換は日付が変わるまで続いた。

翌6日は早朝から赤津研究林を見学、猿投の森の雑木林、人工林など自然観察道を歩き、猿投の森の音楽祭の会場となる林間のくぼ地で昼食をとり、冒頭の猿投山の桜の大樹を見て解散した。

*

1906年、日本山岳会最初の「山岳云規則」には、「本会ハ、山岳及び山岳ニ隷属セル森林、湖沼、溪流(略)、植物、動物(略)ヲ研究スルヲ以テ目的トナシ、且ツ全国ニ登山ノ気風ヲ奨励シ(以下略)」とある。つまり、日本山岳会の創設



100年を経てよみがえった、緑あふれる猿投山の森

者たちは、登山の奨励と同時に、山の自然である森林や動植物の研究までを見据えていた。ゆえに日本山岳会は、日本で最初の自然調査・保護団体だったと思う。

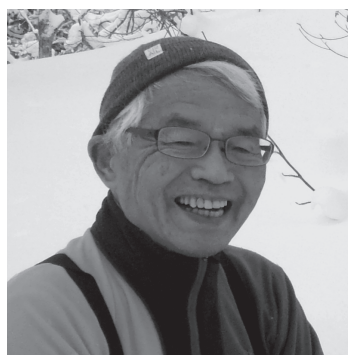
私たちの森づくりの活動は、いまだ微力ではあるが、山の自然を楽しむながら、次世代に美しい森を残すための種子となりたい。そんな思いで、全国の支部を結び付ける森づくり連絡協議会を続けていく気持ち強くした。

末尾になったが、猿投の森づくりの会の皆様が、会場の設営や懇親会と食事まで、心を尽くして準備してくれたことに、改めてお礼を申し上げる。

村井先輩を偲んで

松原尚之

村井龍一先輩が法政大学山岳部に入部したのは、マナスル初登頂の翌年の1957(昭和32)年4月のことである。日本中が登山ブームに沸いていたその時代は、また法政大学山岳部の黄金期でもあった。村井さんが入部したのは、宇奈月温泉から剣岳への極地法登山を4月半ばまでの50日間かけて成功させた、まさにその最中だったし、翌年の冬山合宿ではチンネの



村井龍一(むらい・りゅういち)

会員番号5091

1938年1月 江東区に生まれる

早稲田実業高校山岳部を経て

1957年、法政大学山岳部入部

1960年1月 利尻山・東北稜初登攀

1996~2004年 法政大学山岳部山想会会長

1992年より日本山岳会理事、常務理事、評議員などを歴任

2001~03年 日本山岳会副会長

2013~16年 日本山岳会評議員

2016年12月 77歳と11ヶ月で冬季の剣岳に早月尾根から登頂

2018年8月 79歳で剣岳・チンネ左稜線を登攀

2019年6月21日 逝去、享年81

冬季登攀(第2登)に成功。そして村井さん3年時の冬には利尻山での集中登山成功と、登山史に残るような山行が毎年のごとく行なわれていた。この利尻山合宿で村井さんは4年生の先輩と2人、東北稜の初登攀を2晩のビバークの末に勝ち取った。南稜と仙法志稜は厳冬期初登だったが、東北稜は夏冬通じての未踏ルートだった。

学生時代、年間200日以上も山に入っていた村井さんは、1961(昭和36)年に卒業すると家業の製材会社の仕事に専念し、完全

追

OBITUARY

悼



に山の世界から離れた。それから実に25年もの間、村井さんは山に登ることなく、山岳部とも没交渉となった。

そんな村井さんが、私が3年生となった1986(昭和61)年春、山岳部の新監督として突然現われたのだった。村井さんが慕った1つ上の先輩・渡辺広徳さんが、村井さんに監督就任を懇願した結果であった。監督に就いてしばらくの村井さんはいつもニコニコと優しく、学生の私にさえ君付けで呼び掛けていたほどである。それがいつから「おいっ! 松原」に変わったのだったか……。その監督就任を契機として、村井さんは山の世界に戻って来た。法政大学山岳部や日本山岳会でのその後の村井さんの足跡を思えば、よくぞあのとき私たちの元へ、山の世界へ帰って来てくれた、と思うのである。

1989(平成元)年春、私が隊長を務め、日本山岳会学生部の隊でネパールのクスム・カンゲル(6367m)に遠征した。この登山で1人が足首を骨折するという事故を起こし、そのため学生部担当理事だった故・早坂敬二郎さんが、メンバーの所属山岳部の監督

をJACルームに集めることとなった。村井さんがJACと関わる、それがきっかけになった。早坂さんはその後、自分の後任の学生部担当理事に村井さんを指名し、村井さんのJACとの長く深い付き合いが始まった。

私たち若い者が山に登るのを全力でサポートしてくれた村井さんだったが、ご自身も山登りの夢を終生持ち続けていた。近年は山本篤ガイドらと国内の様々な山に登り、昨夏には79歳でチンネ左稜線を登っている。トレーニングも欠かさず、晴れた日には会津、日光周辺の山に通うのを日課としていた。そして、年末の剣岳・早月尾根には山想会の後輩たちと、2013年を皮切りに6年続けて通い詰めた。後10日ばかりで78歳という2016年末には、自身何度目かの冬の剣岳の山頂に立った。

昨年末にも村井さんは剣岳を目指した。天候が悪く上部までは行けなかったが、このときすでに体の異変に気付いていたようだ。それでも村井さんは、山想会会報の原稿をこんな一文で締めくくった。「新しい年号の年末に傘寿80歳と356日でまた剣の頂上へ」と。

さんけん通信 番外編

高野啓介さんの遭難事故に向き合って

元川里美

山男らしい実直さと繊細さ

昨年の夏、日本山岳会会員の高野啓介さんが、北アルプス・明神岳で亡くなりました。高野さんは、山が最もにぎわうお盆休みの1週間を、独りで山研に滞在しながら日帰りで山歩きをするつもりだったと思います。

しかし、3泊目の晩には山研に戻ることなく明神岳・S字状ルンゼでビバークし、その翌朝の電話で「これから下山する」と言ったきり、連絡が途絶えて行方不明となりました。県警による3日間の懸命な捜索でも発見できず、民間捜索会社のマウンテンワークスによって捜索が引き継がれていたおり、別件で飛んでいた県警のヘリによってワサビ沢右俣の滝付近で高野さんは遺体で発見されました。8月16日朝の最後の電話から17日が経過していました。

この事故は、単独登山者の遭難として数行の簡潔な記事にもなりましたが、それもこの時期に次々と起こる遭難事故のニュースに塗

り替えられて、過去の出来事になるうとしていました。けれども、

私は今回の事故が、単独登山者の不注意による事故として扱われたまま時間が過ぎてしまうことに強い違和感を覚えていました。高野さんの事故は、誤った判断や安易な行動によって引き起こされた結果などではなく、別のところに見落としてはならない本質がある、と感じていました。その感覚は、初めは漠然としたものでしたが、高野さんが残っていた荷物の中に、丁寧なビンールに包まれた大島亮吉の文庫本を見たときから、それは思い込みではない、と確信し始めていました。

高野さんは、それまでにも何度か山研を利用していましたが、独りで来たのは今回が初めてだったと思います。「今回は真面目に山に登るつもりで来た」と言っていました。必要以上のことを自分から話し掛けてくる人ではなかった。私が高野さんのことをあまりよくは知りませんでした。ただ、

8979番という会員番号と64歳という年齢から、昔は相当山をやっていた人だと推測できました。

実際、高野さんの言動には、山男らしい実直さと繊細さが宿っていました。そして、人と交わるよりも自分の思考の中にあることを好んでいる様子で、山研では書架前のテーブルに座り、お酒を口にすることもなく、独りで静かに本を読んでいた。人を寄せ付けない素っ気なさと、ときおりふと見せる少年のような人なつこさに私は少し戸惑って、距離感をつかみかねていました。

1週間の滞在予定で上高地へやって来た高野さんは、2日目には奥又白池まで行っています。宿泊者名簿の備考欄に「前穂高岳(奥又白池・A沢・前穂高・岳沢)」と記して早朝に出掛けたのですが、昼ごろに「雨なので奥又の池から戻ります」という電話を山研に掛けて、早々に帰って来しました。

その日の夜、それまでは黙々と本を読んでいた高野さんが、食堂を往き来していた私にワサビ沢の話を始めました。ワサビ沢―それは明神岳V峰の東側に広がる美しい斜面を流れる沢です。河童橋か

ら明神池へ向かう左岸道のほぼ中間地点から、対岸にそびえる明神岳を見上げると、山腹に鮮やかな緑色の草付と細く流れる滝が見えます。しかし、その斜面のことをあえて気に留める人はほとんどいないので、高野さんの口からワサビ沢という言葉が聞いたとき、私は少し驚きました。ワサビ沢を上げるルートがあり、沢にはいくつかの滝があるということを高野さんはよく知っていました。それから、その日に歩いてきた奥又白池への登山道のことや、このあたり、いわゆるバリエーション・ルートについて、次々と熱く語ったのでした。

S字状ルンゼのはずがワサビ沢で

その翌朝6時ごろに食堂で朝の挨拶を交わした後、高野さんはいつの間にか出掛けていました。宿泊者名簿の備考欄には「前穂高岳」と書いてありましたが、前日のように詳細なルートを書き込んではいなかった。雨予報だから取りやめにして、散策にでも出たのだろうかと思っていました。ところが、夕方4時ごろに電話が掛かってきて「高野です。今日は山研に



小梨平キャンプ場から遠望したS字状ルンゼ

は戻りません」と言うのです。突然のことと状況が飲み込めず、「今どちらですか」と尋ねると「S字状ルンゼの途中です」と言います。雨が降ってきて滝の支点が見付からず、これから暗くなってくるので右岸の樹林帯でビバークする、とのことでした。電波状態が安定せず途切れがちでしたが、高野さんの声は不思議なほど冷静で、語られている内容と声の響きとがあまりにもかけ離れていたのです。私は危険性の程度を判断することができませんでした。

くる細い谷です。昔はきれいなS字カーブを描いていたようですが崩壊によって少しずつ地形は変化し、最近は無雪期にそこを登る人はほとんどいないと思われます。電話を切った後、高野さんはその樹林帯で一夜を過ごしたはずです。そして、翌朝5時の電話で「昨夜は河童橋周辺の宿の灯りが見えていました」「S字状ルンゼ右岸の樹林帯をこのまま下ります」「携帯電話は電池の予備は持っているけど、使用中の残量が少ないので自分から連絡するとき以外は電源を切ります」などと話した後、連絡が一切取れなくなりました。

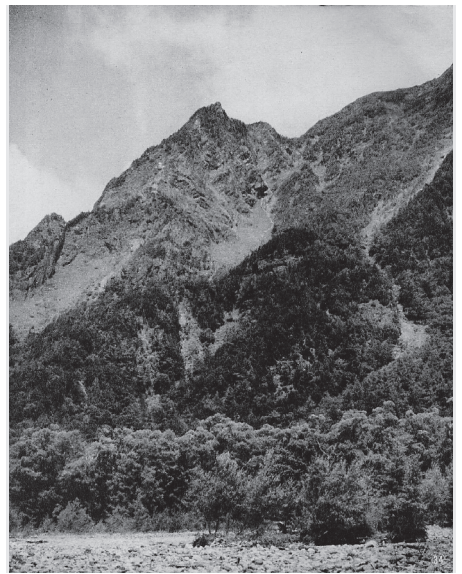
県警の捜索が始まってからも、私は高野さんがまだどこかを歩いている気がしてなりませんでした。熟達者であることは前夜の話から明白でしたし、電話の声は一貫して冷静で清々しく、迷いや不安が微塵も感じられなかったのです、困難な状況に陥ってしまったとは想像できませ

ませんでした。仮にそうであったとしても、河童橋から手が届くほど間近に見える場所です。所在さえ確認しておけば最悪の事態だけは避けられるはず、とどこかで信じていました。しかし、それは私の認識の甘さと、そうであってほしいという願望に過ぎませんでした。私は、高野さんの判断に委ねるという選択に賭けてしまった自分を、どうしようもなく悔やみました。私はもつと早くに、高野さんの心の深くに思いをいたしておくべきだったのです。

9月2日に高野さんが発見されるまでの間、少しずつ高野さんのことが分かってきました。学生時代は早稲田大学の会に所属していたこと。1981年、27歳で日本山岳会に入会したときは、東京労山から派生した同人「赤いリス」の一員であったこと。厳冬の谷川岳・滝沢第3スラブを登攀するような先鋭的なアルパイン・クライマーであったこと。さらに『岩と雪』（1979年）に寄稿された「前穂高岳4峰正面壁の伝説」の存在も明らかにしました。それは、1933年の前穂高岳・北尾根4峰北条・新村ルート初登攀がフリ

ーであったという伝説を、大内尚樹氏らとの実験登攀によって検証したレポートで、登攀技術の高さもさることながら、若い高野さんの緻密な思考と山への思想を余すところなく伝えていました。当時、昭和初期のクライマーたちの事跡調査に取り組もうとしていた高野さんは、黎明期のシンブルな登攀に敬意を表し、ハーケンの多用はすばらしい素材を殺してしまうと感じていました。そして、「この愛すべき壁たちの誇りを取り戻すために、私たちは新しい価値と可能性を見つけてやらなければならぬ」と結んでいました。私はこの記事を読んだとき、日本山岳会に隠れた宝をひとり失ったのかもしれない、と思いました。

捜索はワサビ沢も視野に入れないから進められてはいましたが、明神岳西壁のS字状ルンゼを下ると言っていた高野さんが、東側のワサビ沢の、より危険な右俣で見付かったというのは、やはり意外なことでした。のちのマウンテンウォークスの報告にも記されていたように、水平方向の移動は考えられないので、高野さんは電話を切った後になんらかの理由で雨のルンゼ



梓川左岸道から見上げたワサビ沢と2263m峰

を登り返して、鞍部を乗越したところになります。その間、救助要請をすることも、山研に連絡をすることも結局ありませんでした。高野さんは登山計画書を提出していませんでしたが、自宅で見えられたメモには「上高地 A 沢ワサビ沢 コブ尾根」と記されていたといひます。高野さんは、家族にも予定ルートについては告げていませんが、明らかにそのメモには忠実であろうとしていました。

久しぶりに真面目に山へ

事故から2ヶ月が過ぎたころ、稲門山の会の先輩で、日本山岳会の会員でもある行方正幸さんが、高野さんの詳しい経歴を送って来

てくれました。そこには、聡明で気高く、やはりどこか人なつこい若かりしころの高野さんがいました。大学時代に山を覚え、人一倍のめり込み、登攀の経験を重ね、持ち前の粘り強さでトップ・クライマーの域に達して

いきました。そして、1978年1月、両角泰夫・小松幸三両氏とともに3人で荒天の前穂高岳・北尾根4峰正面壁を完登したものの、下山時に慶応尾根で雪崩に流されて遭難、両角さんは亡くなり、高野さんと小松さんはかろうじて助かりました。しかし、その小松さんも、のちに幼い子どもたちを残してマッキンリー（現デナリ）で亡くなることになりました。

一方、海外遠征のような登山には興味を示していなかったという高野さんは、先輩の行方さんとの厳冬期谷川岳・滝沢第3スラブの後、危険なアルパイン・クライミングからは遠ざかってフリー・クラ

イミングに転向していったといひます。危険な山から離れていったきっかけのひとつは、慶応尾根での遭難事故だったのかもしれない。ただ、最近までの長い間、山に戻ることがなかったのは、何よりも、愛する奥様と子どもたちとの日々を守るためだったはずで、高野さんは努めて市井の人であろうとしていました。高野さんの部屋の本棚は山の本で埋め尽くされ、気付けばいつもそれらを讀んでいた、と奥様が話していました。高野さんは、ときにどうしようもなく山を恋しがる心をあやしながら現実を生き、山の本を開いては、そこに思考を解き放っていたのかもしれない。

そうして久しぶりに戻って来た高野さんの目に、山はどのように映っていたのでしょうか。「最近の山小屋は物音でトラブルになると聞いている。迷惑を掛けたくないで、寝袋で独りで寝たい」と開口一番、高野さんは私に言いました。懐かしい山は見事に大衆化を果たし、その奥深くにまで社会システムの触手が及んでしまっていることに困惑し、ある種の抵抗や孤独を感じていたのかもしれない。高野さんにとって山は自由の象徴

であると同時に、感情すら持ち合わせた、ひとつの聖なる生命体のように感じていたに違いありません。その山に分け入るには、かつてそうであったように、山と自分自身との間に、互いの自由を侵さないという情緒的な契約さえ成立していればそれで十分だった。そこに他者の力が介在する理由など、あるはずもなかった。そして、思ひ出そうとすれば心が震えるほど濃密な時を過ごした場所によくやく立ち、自分を解放し、何にも縛られることなく、納得ゆくまで山の感触を確かめようとしていたのかもしれない。それが、高野さんの「真面目に山に登るつもりで来た」という言葉の真意だったのだと思います。

確かに、それを無謀というのかもしれませんが。多くの人が高野さんのために動くことにもなりませんでした。けれども、ほんのわずかも、そんな切ない思いを想像し、共鳴することがなかったなら、私たちはいったい何に拠って山へ向かうとしていたのでしょうか。

高野さんが発見されたと連絡が入った翌日、マウンテンワークスの成田賢二さんたちがロープ類の回

収をした後に山研に立ち寄ってくれました。マウンテンワークスは、稲門山の会が民間捜索隊を探して次々と断られるなかで、唯一高野さんの捜索を引き受けてくれた会社です。話を聞くと、行方不明のまま見付かっている登山者は意外に多く、捜索の依頼も少なくはないと言います。しかし、本人の性格や物事の考え方が分かっているければ行方不明者を探すことは難しく、依頼を受けた場合には、できる限り広く深くその人の情報を得る努力をするのだそうです。そうすることで初めて、その人が何を考えながらどこを目指してどの道を歩こうとしたのかが見えてくるのだと教えてくれました。成田さんが発する言葉には、遭難者への優しさが込められていました。

成田さんたちは、語られることのなかった声に耳を澄まし、クライマーだけが持つ勘を駆使しながら高野さんが見ていたもの、見ようとしていたものを丁寧に探ってくれていたのだと思います。

今回の事故は、登山計画書が提出されていなかったことが繰り返し強調されましたが、もしも高野さんが成田さんのこうした話をど

こかで耳にすることがあったなら、自分を理解しようとする努力してくれるであろう若い同志たちの優しさに報いるために、あるいは登山計画書を残していたかもしれません。

つい先日、26歳の高野さんが『山と溪谷』に寄せた「聖平小屋のひと夏」というタイトルの文章を読みました。知人に誘われて南アルプスの小屋番を任されたときのエピソードで、登山者との触れ合いや草原で寝転がる心地良さ、そして、自然への礼賛が綴られています。北条・新村ルートの張り詰めた検証とは打って変わって、そこには牧歌的な旋律が流れていました。それと同じ旋律を、高野さんはあの美しいワサビ沢を歩きながら口にしていたのではないかと私は思いました。

〈付記〉5年間、上高地山岳研究所の管理人を務めてくださった元川里美さんが、心残りだった出来事を長文のエッセイとして綴ってくださいました。長い間、ご苦労様でした。

（公報編集委員会）
〈2点の写真は、『穂高の岩場2』（昭和35年、岩棲会著、明文堂刊）より転載させていただきました〉

令和元年度 第9回登山教室 指導者養成講習会の案内

日本山岳会支部事業委員会

登山教室・リーダー育成事業を援助することを目的として、必要な知識と技術を学ぶ指導者養成講習会を昨年に続き「安藤百福センター」で開催します。登山のすばらしさを伝え、安全な登山を実践できる資質を具えた会員の増強、支部活動の一層の発展を目的として、積雪期登山技術講習を以下のとおり行ないますので、奮ってご参加ください。

●主催…公益社団法人日本山岳会 支部事業委員会

●日時…令和2年2月1日(土)13:00集合後、講義／2日(日)水ノ塔山にて実技講習後、16:30解散
●場所…安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（長野県小諸市大久保1100、JR小諸駅よりタクシー10分）

●参加費用…1万円（概算）宿泊費・食事2食・現地交通費・資料代を含む。参加費は受付時に集金。なお、参加者の人数により現地交通費（貸切バス代）が変わる可能性があります。

●講義内容

【座学講習】「遭難防止と山岳

遭難救助活動」（仮題）講師Ⅱ 長野県警察山岳遭難救助隊

「低体温症・凍傷の基礎知識と対策」（仮題）講師Ⅱ 植木貞一郎（医療委員会委員、医師）

「登山教室実施要領」講師Ⅱ 重廣恒夫（前副会長、支部事業委員会委員）

「セルフレスキュー講座」講師Ⅱ 川瀬恵一（遭難対策委員会委員長）

※夕食後、講師を囲んだ懇親会を予定しています。

【実技講習】「実践セルフレスキュー」講師Ⅱ 川瀬恵一、重廣恒夫
●参加資格…日本山岳会会員で、支部山行・登山教室のリーダーを目指す者。山岳保険に加入している者。

●募集人員…20名

●締切日…令和2年1月15日(水)。定員になり次第締め切り。

●申込み方法…11月中旬、各支部長宛に送付する実施要項を確認のうえ添付の申込み書に記入し、メールにて左記宛にお送りください。申込み・問合せⅡ 支部事業委員会・中村哲也まで。✉ jac-shibu@jac.or.jp

●その他…実技講習日の昼食および雪山登山装備は、各自持参してください。

N 東北 S 南北

第61回有志閑談会の報告

関塚貞亨

6月21日に新装なった後楽園涵徳亭で開かれた有志閑談会は充実した会合であった。発足当初の有志閑談会は役員と一般会員が懇談する会であったが、この十数年は現役執行役員の出席がなく、古い会員だけの会合となつているのは残念なことである。

世話役の肝煎りで、4人の講演者のお話はすばらしかった。

《芳野超夫氏の講演》

マナスル登山で一番問題になっていたのは無線機です。戦時中の軍用のもは頑丈で50kgもある。米軍が使っていた一番軽いので17kgもあった。第2次の前だったと思うが、槇さんからお呼びがあった軽い無線機を作れないかと相談があった。当時、私は大学を卒業、

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

研究室で助手をしていたので、片側に受信機、反対側に送信機を置く構造で、世界で初めてモールド式の無線機を造った。3・5kgの軽いものだった。

その後スイス、英国、米国から問合せがあり、山岳会から無償で提供し、そのほかからも問合せがいつぱいあった。汎用のトランシーバーはみなこの方式で作られています。この無線機はマナスル隊で役に立っていて、松田さんがハイキャンプで肺炎になったとき、ベースにいたドクターの指示で応急措置を取り、翌朝、下に降りして一命を取り止めました。あれから60年が経ち、今思うと、このモールド式は特許を取っていれば山岳会もずいぶん儲かったと思います。残念なことでした。

《註1》この講演を頼みにいった世話役の渡部温子、夏原寿一両氏によると「芳野先生はIEEE(米

国に本部を置き36万人の会員を擁する電気工学の学術研究団体)の取締役を長年務められ、日本人でただ1人殿堂入りしている」ということである。

《長田義則氏のお話》

初めに1958年に「鹿肉を食う会」として始まった静岡支部のもみじ会の10回までの資料を配布、この資料は人工衛星のソーラーパネルに使われているミウラ折りにしました。また中村清太郎、松方三郎、足立源一郎さんなど出席者のことを話され、特に松方さんがご飯にお汁粉を掛けて食べられた甘党ぶりが印象に残っています。

持参した掛け軸に「不仙」のハンコが押してあります。茨木猪之吉は明治45年に小諸から立山、富山市を通っておりますが、当時は不仙を名乗っております。この軸はサインでなくハンコです。お宝鑑定じゃありませんが、それらしい絵だと思えます。今年求めたものです。

《溝口洋三氏のお話》

芳野先生の無線機を晩餐会の展示会で披露したとき、私が皇太子殿下(今上天皇)に説明することになっておりましたので、先生にレ

クチャーを受けまして殿下に説明しました。そのときの写真を先生に進呈します。

山岳会が始まったころ山岳画家がたくさん入りました。山の日制定を記念して山口県立美術館、松本市美術館で展覧会を開いたとき、この方々の作品をプリントして配りました。東の横山大観、西の竹内栖鳳と言われる文化勲章受章者、岩波文庫の表紙をデザインした平福百穂、会員の石崎光遥さんは富山の出身で会員の棟方志功と交流がありました。これは2人で展覧会を開いたときの写真です。

先ほど足立源一郎さんの話が出ましたが、自ら設計した住まいが奈良にあつて特別有形文化財になっています。そのほか吉田博、下藤次郎の話などは省く。

《註2》山岳会発足当時は登山者、山岳画家のほか島崎藤村、田山花袋などの文学者、神保小虎など学者、演劇界の人も会員となつていて、当時は最先端の文化的クラブであった。

《神崎忠男氏の講話》

昨年11月に亡くなられた松田雄一さんを偲ぶための写真をスライドで写したほか、今西錦司、吉沢、

望月、島田、山田、織内、藤平、山崎、羽田、鰐坂さんなどエベレストより高い所に行った方々の映像が映し出された。

神崎さんはほかにも映したい方が大勢いるのだけれど、写真が手に入らなかった。こういう所で見ると山岳会の歴史の流れだと思う。あれのときは僕の所へ写真を送ってください(笑)。

次に新入会員として石原達夫(5646)、菅原廣男(8366)、中村勉(9498・青森支部長)の紹介と挨拶。出席会員の話があり、3時間以上の楽しい懇談が続いたが、その詳細は省く。

終わりに、長期にわたって世話役を務めている中川武氏、A4で26ページの立派な報告書を作成して、出席会員はもちろん、欠席会員にも配布していただいた世話役補佐の渡部温子、夏原寿一両氏のご苦労に深く感謝する。

ライチョウ保護絵葉書 配達の歩荷実施報告

日吉健治

先日、会報「山」7月号(890

号)に掲載された、大森弘一郎会員の発起による「南アルプスへのライチョウ保護絵葉書の歩荷」に行ってきたので、その報告をしたいと思う。

まず歩荷する絵葉書だが、これは絶滅が懸念されるライチョウを守るための山での行動を呼び掛ける内容とライチョウの写真が載った美しい絵葉書だ。この葉書は、2ヶ所の小屋にある「雷鳥募金」と書かれた、ライチョウの形をした募金箱に入れていただいたお金で作られたもので、今年は1万枚ほど作成されたとのこと。

今回の歩荷は、この絵葉書を登山者に配布してもらうため、アルプスの各山小屋に持つて上がり、配布をお願いするという内容だ。

私はこの絵葉書を持つて、10月5、6日に南ア・白峰三山縦走、それに先立つ9月13・15日に北ア・穂高連峰に行ってきた。

白峰三山は初日、早朝に山梨県早川町の奈良田を出発、大門沢を詰め、農鳥岳を越えて農鳥小屋で1泊。翌日に間ノ岳、北岳と越えて広河原に降りる1泊2日の行程だった。

途中、農鳥小屋から北岳肩ノ小

屋までの稜線上の各山小屋と広河原インフォメーション・センターの計4ヶ所に立ち寄り、配布をお願いした。

この活動は、日本山岳会有志による活動であること、無償で絵葉書を配布して登山者へライチョウを守るための情宣を行なっていること、1回限りではなく今後も継続して配布を行ないたい旨を説明し、協力をお願いした。

結果はどれも快く引き受けていただけた。特に農鳥小屋の深澤さん、肩ノ小屋の森本さんには、このような活動はとてもありがたいと言われ、協力を約束していただいた。また、小屋周辺のライチョウの現状についての話も伺え、貴重な情報を得ることができた。

今回出向いた南ア・白峰三山の各山小屋は、皆ライチョウや山の環境を大変気に掛けていて、今後の私たちの活動にも協力いただけることを確信した。

北ア・穂高連峰周囲での絵葉書配布は、上高地から横尾を経て涸沢で1泊。翌日、北穂南稜から北穂・涸沢槍・涸沢岳を経て白出のCOLまで。翌々日、白出のCOLから奥穂・吊尾根・前穂・重太郎新

「会員優待サービス一覧」変更のお知らせ

*「北アルプス」剱御前小舎／仙人池ヒュッテ 先方のご都合により、両山荘を優待サービスの対象から削除します。

〈会員サービスWG〉

道ノ岳沢で上高地に戻る行程。3ヶ所の山小屋でお願いし、そのうち涸沢小屋と山研の2ヶ所で協力いただけることとなった。

山研管理人の元川さんはもちろんのこと、涸沢小屋の芝田さんも私たちの活動に非常に協力的だった。また、穂高周辺のライチョウの状況などを聞くことができた。そして、芝田さんの情報どおりの場所でのライチョウに遭遇することができたのだった。

北アと南アの歩荷で7ヶ所回り、6ヶ所で協力いただけ、総じて私たちの活動が山小屋にも受け入れられると感じた。もちろん目的は山小屋に喜んでもらうことではなく、ライチョウを守ることだが、今後も協力していただける山小屋の方々とともにこの活動を続けていく考えだ。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

図書委員会

南会津山の会が創立60周年記念誌を発刊

南会津山の会が、昨年60周年を迎え、10月20日には二岐温泉大丸あすなろ荘で記念総会（116回総会）を開催し、本年6月には創立60周年記念誌として『いろりばた』を発刊した。私は、当会の中では、最も入会歴が短い会員であるが（平成25年入会）、若手ということで、世話役・編集委員としてこれらの行事に参加させていただいた。

当会は昭和33年に福島県下のメンバーが中心となって月刊誌『山と溪谷』で会員を募り、応じた14名で発足。その後、会員は地元の会津地区や福島県内だけでなく、首都圏在住者にも広がり、最盛期には56名の会員数を誇った。日本山岳会会員で当会に入会しているケースも多く、発足当初から川崎

隆章氏が顧問として迎えられており、川崎精雄氏や望月達夫氏など、私が登山を始めて間もないころからバイブルとしてその著書を愛読させていただいた、オーソリテイの方々も入会されていた。

会長を置かず、会則を設けず、会としての山行は行なわず、会員は南会津山域の山に登り、麓の民俗研究などを行ない、会報に発表するという自由な精神の下、これまで会は運営されてきた。会報『いろりばた』は72号まで発行されており、それらの集大成として昭和47年に『いろりばた』、平成16年に『続いろりばた』、平成20年に『南会津』が単行本として出版されており、交通事情の良くない、秘境性を持ち合わせた南会津山域のパイオニアとしての役割を果たしてきた。

さて、今回発刊された創立60周年記念誌『いろりばた』は103ページからなり、会年表や記念総会

写真、会報総目次などの会の歴史を物語る資料のほか、会員の登山足跡や執筆活動についてまとめられている。

今日、交通網の発達につれて南会津山域もその秘境性が失われてきており、当会も会員の高齢化と会員数の減少（8月末現在24名）が生じている。このような状況下で、会の今後をどうしていくのか、存続も含めて考えていく時期になっている。創立60周年が最後の務めとならないことを願うばかりである。

（木根康行）

山行委員会

「第8回北アルプス全山縦走シリーズ 西穂高岳・焼岳・霞沢岳を巡る」に参加して

8月30日（金）（前泊）～9月4日（水）13名で晩夏の北アルプスを楽しんだ。8月30日の空模様では、雨天の中を歩くことを覚悟していたが、翌日は前日までが嘘のように朝からスカッと晴れて、気持ちの良いスタートだった。

新穂高ロープウェイを降りてから西穂山荘までの樹林帯も、雨に濡れた木々の緑が陽の光できらき

らと美しかった。西穂山荘から丸山、独標まで順調に歩き、独標からその先に進むメンバーと、ここまですうメンバに分かれて行動することになった。

私は岩稜地帯はほぼ初心者で、この山行に参加するに当たって自信が持てず、独標までが限界だろうと思っていた。だが、独標からの眺望に感動し、この先に見える景色を想像すると、どうしても行

ってみたくなった。山行委員会の方に手厚いサポートをいただくことで、挑戦することにした。西穂まで緊張の連続だったが、山頂に到達した瞬間、目に飛び込んできた景色は想像を超える迫力と美しさだった。挑戦して良かった！

9月1日(日)、西穂山荘から焼岳山荘までは登り下りがこれでもかと続き、焼岳が遠く感じた。焼岳を目指して登り始めると地熱で温かく、硫黄の臭いも漂う。頂上を見上げながら登っていくと巨岩がドーンと迫ってきて、行く手を阻まれているような感じだ。頂上ではやや雲が多かったものの、360度の大パノラマが広がっていた。黒岳、鷲羽岳、反対側には槍・穂高連峰とまさに北アルプスの展望

台といった感じだ。焼岳にも大満足！

この日の宿泊先の山研では山行委員会の名シェフ、高橋聡さんが腕をふるってくださったご馳走で懇親を深めつつ、大いに盛り上がった。疲れを癒して翌日からの霞沢岳への期待が高まる。

9月2日(月)、徳本峠小屋までは雨に降られずに行けそうだと思っていたが、無常にも雨に降られ、翌日の霞沢岳は断念して安全第一でジャンクション・ピークまで下山することとした。下山後には徳沢ロッジまで梓川脇の遊歩道を散策して上高地の景色も楽しめた。西穂、焼岳のすばらしい眺望や皆さんとの楽しい出会いがあり、今回参加して本当に良かった。高橋努リーダーはじめ、山行委員会皆さんのお陰と、お礼を申し上げます。(東海支部・前川みどり)

麗山会

麗山会設立15周年記念山行 ジョージア・トレッキング

《経過》

設立当初で済州島・ハンラ山、10周年でベトナム・ファンシーパ

ン、そして、15周年でコーカサス地方のジョージアを記念山行として催行した。

9月総会から記念事業として多くの案が出ていたが、ジョージア案が浮上。そのころNHKで「天国に一番近い教会」、そして、山岳景観と草原に咲く花々や独特な文化が放映された。興味深い国であった。国の位置や風土、コーカサス山脈と多くの歴史的構造物や遺産など不理解であった。

《事前調整》

だれもが未知なる国への旅には不安があった。コーカサス山脈への憧れはあり、登山は無理にしても概要を確認するトレッキングと風土に浸る旅、で具体化を進めた。ジョージアに詳しい旅行業者を選定し、会員の伝手で取得した資料で固まってきた。中東のカタール・ドーハを経由するアプローチのため交通手段確保など、早急な事務手続きが必要であった。詳細準備はそれから始まった。

《コース概要》

成田からカタール・ドーハ、ジョージア首都トビリシへ、ツカルツポ・メスティア・ウシユグリを巡る行程は帰国まで12日間の旅だ。各都市

で教会群や旧跡を見学、氷河や花が咲き乱れる尾根や草原をトレッキング、雪に覆われたウシユバ峰、シハラ峰の荒々しい山肌を満喫した(6月30日〜7月11日間)。

《国情》

欧州・中東・アジア・ロシア・黒海に囲まれ、近代でもロシアに領土を侵略されるなど悩みを持つ。独自の言語を持ち、北のコーカサス山脈・黒海・トルコ・アルメニア・アゼルバイジャンと国境が接する。親日国で「栃ノ心」が相撲で活躍している。

首都トビリシは歴史的構造物と芸術的建築物が点在し、大樹のプラタナスが路上に植生されている。アパートなどの建築物はソ連時代を思わせる。東部はブドウ栽培が盛んであり「ジョージア産ワイン」は美味である。犬・牛は多く、路上で寝ている。主要都市以外では馬、豚も路上で草などを食んでいる。車両の7割ほどは日本車であった。危険を感じたことはない。再び登山対象として訪れたい。

《メンバー》麗山会会員8名、文責代表・畑島良一

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

東九州支部

第18回青少年体験登山大会

東九州支部主催の18回目を迎える青少年体験登山大会（青少年体験教室）は、9月8日（日）に恒例の牧ノ戸峠から久住山頂（1787m）までのルートで盛大に実施された。

参加者は、大分県から貸し切りバスでの参加者26名と、牧ノ戸峠登山口現地集合組35名の、全部で61名である。

「青少年」と銘打ってはいるが、年齢には関係なく広く一般の山登りの初心者をも対象にした一日体験登山で、昨年は130名を超える

参加申し込みがあった。しかし、大型台風の影響で3日前からキャンセルが相次ぎ、半数以下の参加となり、当日は雨と濃霧の中、予定コースを変更して近くの獅師岳までの登山となった。今年は幸い良い天気になった。登山口のレストハウス横の広場で開会セレモニー。加藤支部長の挨拶の後、1日の行動予定の説明。出発前の準備体操、そして、参加者の自主申告による組編成である。

「健脚組」は8名で、九州本土最高峰の中岳（1791m）まで足を延ばして久住山へ、そして、帰りは星生山（1762m）を経由、「元氣組」は20名で登りに星生山経由で久住山へ、そして、「のんびり組」は33名と多いので、2班に分け、牧ノ戸峠から久住山まで往復のコースだ。各組、班ごとに支部会員をリーダー、サブリーダー、エスコート要員として配置する。

午前9時前、健脚組がまず出発、続いて元氣組、その後ののんびり組が続く。薄曇りで、さほど強い日射しもなく、ちょうど良い山登り日和である。皆元気でペースも良く、ほぼ予定通りの足の運びだ。

令和元年度（後期） 「海外登山助成対象登山計画」募集 海外登山助成金審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山助成金」による助成を行なっています。第42回を数える今回も、困難を求めた挑戦、新鮮でオリジナリティのある発想、夢が広がる計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。会員資格やパーティ編成など条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

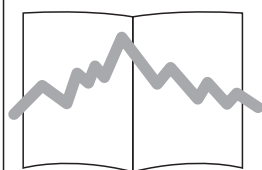
- 対象期間 2020年2月1日～2020年7月31日の間に海外の山へ出発する登山隊
- 申込み方法 所定の様式（事務局にご請求ください）に記入し、登山計画書（5通）を添えて申請してください。併せて、登山計画書をデータにてメール送信してください（✉ jac-room@jac.or.jp、件名「海外登山助成対象登山計画送付」）。
- 申込み締切 2020年1月10日（当日消印有効）
- 審査と助成 2020年2月中旬に委員会で審査後、理事会で助成決定をいたします。
- 報告と記録掲載 助成対象となった登山隊は後日、必ず報告書を提出してください。会報「山」や機関誌『山岳』に記録を掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局
電話03-3261-4433 ✉ jac-room@jac.or.jp

薄曇りの空は柔らかな日射しで、心配していた暑さはなく、むしろ吹く風が涼し過ぎるほどである。遠景はややモヤが懸かって、阿蘇や祖母などの遠景の眺望は今ひとつであったが、山頂を取り巻く九重連山の優しい、なだらかな峰々の連なり、遠くに霞む由布岳や万年山、眼下に広がる久住高原の雄大な景色などに感嘆の声が聞こえる。

12時過ぎにのんびり組、健脚組、元氣組の順番で相次いで山頂に到着。弁当を開いて大展望を堪能しながら楽しいひととき。そして、全員集合の記念写真の撮影の後、健脚組から下山開始。午後3時30分にほぼ予定どおり参加者全員がケガもなく元気に牧ノ戸峠へ下山。最終下山組が下り終えたちょうどそのころ、曇ってきた午後の空からパラパラと雨粒。

雨を避けてレストハウスの軒先を借りて解散式だ。今年の参加者は最年少が8歳(小2)、最高齢者が88歳と、実に80年の年齢差のある登山隊であったが、皆元気で、大満足のうちに終えた一日体験登山であった。

(飯田勝之)



図書紹介



北杜夫著

ヤマケイ文庫新編集エッセイ選集
どくとるマンボウ 青春の山



2018年10月
山と溪谷社刊
文庫判 277頁
定価800円+税

『どくとるマンボウ青春記』や『どくとるマンボウ航海記』を読まれた人は多いのではないだろうか。私もずいぶん昔にそのユーモア溢れる文章で楽しませてもらっている。はて、『どくとるマンボウ 青春の山』は読んでいなかったが、そのころあったのだろうかと思った。実は、あとがきの方に貴美子夫人が「山登りや昆虫採集で訪れた自然について書いた作品を、編集部と相談の上でまとめたものです」と書いたように、北杜夫氏の山に

関する新聞や雑誌に発表されたエッセイなどをまとめたものなのである。北杜夫氏の山の本と言えば『白きたおやかな峰』があり、JACの皆さんは読まれていることと思う。

これはカラコルムのデラン峰(7273m)を目指す日本の遠征隊に医師として参加したときのことを元に小説にされたものである。この遠征のときのことを書いたエッセイがこの本の後半の大部分を占めている。ここに掲載されている文章と小説の『白きたおやかな峰』を比べて読むと、小説の大部分が実際に遠征で見聞きしたものであることが分かる。小説はラストが実際と異なる。

コックとして雇ったメルバーンは小説でも、同じメルバーンという名前で登場している。このことも北杜夫氏は「先ほど『白きたおやかな峰』という長編小説を出した

が、この中に登場するメルバーンは、実際の人物をほとんどそっくりになぞってある。小説の登場人物にモデルがあっても、多少の作り変えは行なわれるものだが、メルバーンの場合、そのまま書いて立派に通用する魅力を持っていた」と書いている。

昆虫が大好きであった北杜夫氏は終戦の年に豊かな自然に囲まれた旧制松本高校へ入学している。高山蝶を追う姿も書かれている。私が驚いたのは、徳本峠越えを15回以上も行なっており、上高地の小梨平から島々まで4時間を切る

記録を持っていると書いていることであつた。北杜夫氏の「青春の山」がそこにあつたのだと思つた。

この本の紹介を書くに当たつて、青春記や航海記も読み直してみた。すると面白いことも見付かった。

ドイツでガスピストルを購入したが、航海記では日本に戻る船上で突如現れたウミボウズにそれを取られたと書いてある。しかし、この『青春の山』には、航海記を出版して数年後に、「航海記は面白かつた」と言つてやつて来た警察官の話が出てくる。読者ですと言つてやつて来た警察官は、上司に言われてやつて来たのだろう。ガスピストルの所持を確認にやつて来たのであつた。このやりとりも北杜夫氏のユーモアある筆致で書かれている。

色々な所から集めた文章なので、重複する内容もある。しかし、そのようなことに目くじらを立てず読めばいいと私は思う。

そして、この本を機会に、『白きたおやかな峰』をはじめとして青春記や航海記なども読み直してみると、味わい深い読書となること間違いでない。

(北島洋一)

会務報告

令和元年度第6回(10月度)理事会 議事録

日時 令和元年10月9日(水)19時00分～21時30分

場所 集会室

【出席者】古野会長、野澤・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・神尾・飯田・近藤・波多野各理事、黒川、石川各監事
【欠席者】山本副会長、清水・柏各理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・準会員規程の変更

これまで「準会員規程」により、準会員は支部役員に就任できなかったが、「準会員規程」を改め、就任可能にした。ただし、支部長は議決権が必要のため、就任不可とした。(賛成12名、反対なしで承認)

2・準会員制度検証プロジェクトチームの廃止

準会員から正会員への移行手続きの簡略化、および準会員規程の変更を終え、本プロジェクトチームを廃止する。今後、準会員制度については公益法人運営委員会等で扱う。(賛成12名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・上高地山岳研究所の改善計画が示され、協議した。(安井)

2・支部および本部での名簿作成と、当会における個人情報保護法対応について協議した。(永田)

【報告事項】

1・正会員5名、準会員3名の入会承認の報告があつた。(古野)
2・寄附金および助成金受入4件について報告があつた。(古川)
3・9月28日、29日に行なわれた支部合同会議について報告があつた。(永田)

4・登山助成金の助成辞退の報告があつた。(坂井)

5・創刊する「YOUTH 山」についての報告があつた。(野澤)

6・寄附関連の案件について報告があつた。(永田)

7・カシオ腕時計の販売結果報告と次回の販売について報告があつた。(永田)

8・晩餐会について報告があつた。(永田)

9・廃ロープ提供の依頼の報告があつた。(永田)

10・「山」10月号について報告があつた。(節田)

ルーム誌 10月

1日 常務理事会 スケッチクラブ

2日 山行委員会 図書委員会
YOUTH CLUB

3日 YOUTH CLUB 山岳地理クラブ

4日 自然保護委員会 YOUTH CLUB

7日 総務委員会 スキークラブ
スケッチクラブ 緑爽会

8日 山岳研究所運営委員会 フォトクラブ

9日	理事会 休山会 山想倶楽部
10日	支部事業委員会 YOUT H CLUB 九五会
16日	三水会 つくも会 マウンテンカルチャークラブ
17日	科学委員会 みちのり山の会 沢登り同好会Ⅱ
18日	自然保護委員会 山の自然学研究会
21日	総務委員会 資料映像委員会
23日	家族登山普及委員会 フォトクラブ 麗山会
24日	公益法人運営委員会 学生部 01会 山遊会
25日	記念事業委員会 総務委員会 緑爽会
28日	青年部 緑爽会
29日	スキークラブ 里山歴史研究会
30日	平日クラブ
31日	資料映像委員会 デジタルメディア委員会 バックカン トリークラブ
	10月来室者502名

会員異動

物故

長沼雄志(5830) 19・9・28

黒柳満義(6330) 19・8・18
大野秀樹(8373) 19・5・28
竹内哲夫(9776) 19・9・12
渡辺登司美(10135) 19・10・20
宮竹重里(10772) 19・10・28
小野信也(13689) 19・10・8

I
N
F
O
R
M

インフォメーション

A
T
I
O
N

◆NPO山の自然学クラブ 講演・研究発表会のお知らせ

12月21日(土)12時30分から、東京・下北沢の北沢タウンホールで、高尾の森の講演会と会員の研究発表会を開催します。また、山の自然に関する写真の展示も行ないます。会費は500円です。参加の申込みは、電子メール shizengaku@shizen.or.jp に、^(イ)連絡ください。
(NPO山の自然学クラブ理事長・大蔵喜福)

訂正

「会報」10月号(893号)、会員異動・退会欄に掲載の、村井龍一

退会

渡辺 斉(6391)
井上 佑(11454) 北九州
成田敏昭(11871) 青森
松村 保(13693)

様(5091)は2019年6月21日にお亡くなりになつています。「物故欄」に掲載すべきところ、手違いで「退会欄」に載せてしまいました。

訂正してお詫び申し上げます。

事務局

『山岳』2019年版(第114号) 125頁上段、左から5行目、「会津山の会」とあるのは、「南会津山の会」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

『山岳』編集委員会

◆編集後記◆

●今月10日は、阿武隈山地の蓬田岳に行ってきました。隆起準平原で丘陵状の山が多い同山地には珍しく秀麗な山容を誇り、里人たちに「平田富士」と呼ばれ、親しまれている山です。この日は折しも祝賀御列の儀」の当日で、文字どおり日本晴れ。一等三角点で、菅布禰神社が祀られている花崗岩塔の山頂に立つと、四圍の展望を心ゆくまで楽しむことができました。

●泊まりは南方の母畑温泉下の湯。ところが、先般の19号台風のとき、阿武隈川上流の千五沢ダムが夜間放水したため、1階部分が被災したとのこと。その傷跡がそこかしこに散見されましたが、17人も山仲間たちと泊まったので、少しは復興支援になったのではないかと思います。(節田重節)

日本山岳会会報 山 894号

2019年(令和元年)11月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社